

はじめに

私たち金沢大学附属小学校の学校研究は、「であう・つながる・うまれる コミュニケーション」というテーマの四年目、最終年度を迎えました。四年間の研究は、単に授業において子どもたちの意見交流の場を設ける方策を探るのみではなく、交流を通じて子どもの思考がどのように発展するか、他からの刺激に応じてどのように新しい知識を生み出すかを考察の対象とし、子どもの思考の深まりを支援するコミュニケーションのあり方を探求するものでした。

児童の頭の中の見えない過程である「思考」に注意を払いながら、実践上では、子どもたちが交流を通して変化する、見える姿として、思考の発展を捉えていく必要がありました。四年間、このテーマをめぐる授業実践と議論を重ねて来た結果として、明解な最終的提案に達したとは、必ずしも言えません。ある意味では、試行錯誤がまだ続いているのではないかと思います。この紀要を御覧いただく皆様には、私たちの取り組んだテーマを共感的に受け止めていただくとともに、至らぬ点については忌憚のないご批判をいただければと願っております。

「学校研究」は日本の教育を支えてきた文化であると言われます。しかし、学校教育が従来以上にさまざまな問題を抱えるようになった現状において、学校研究のあり方があらためて問われていることも確かでありましょう。組織としての学校の力を強化する研究成果が求められる一方で、教員の負担が加重になっていく現実も否定できません。本校でもそうした事情は、基本的に公立学校と変わりありません。

けれども、原点に戻って考えてみれば、継続的な共同のテーマによる誠実な研究の積み重ねは、それに携わった教員各自の経験を深く豊かなものにすることは間違いありません。また、意欲的な授業実践に触れた子どもたちの心に、真摯さというものの変わらぬ姿が刻まれていくことも確かであると思われまふ。それらは、今すぐにはなくとも、いずれ花開く潜在的な教育資源です。その場で確認可能な成果を重視する近年の傾向にも相応の理はありますが、その時その場では目立たない成長(児童生徒、そして教師の)の可能性を信じるこそ、教育の根本です。そのような悠長な考えは古風に見えます。しかし、最新の認知科学の展開の中で、知識形成の過程における質的な不連続すなわち飛躍の面があらためて確認されていることから、飛躍に先立って蓄積する潜在的な成長が科学的に見直される日は、遠からず訪れると思われまふ。

私たちは、学校研究の意義をじっくりと探りつつ、今後も歩んでいきたいと考えております。今日まで本校の研究を支えていただいた多くの皆様に心より感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成 25 年 11 月

金沢大学附属小学校 校長 山本 一